



あるアジア系オーストラリア人のアイデンティティ構築

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲西, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017084

あるアジア系オーストラリア人のアイデンティティ構築

仲 西 恭 子

1. はじめに

本論では、作家・コラムニストとして活躍するアジア系（香港系）オーストラリア人二世のベンジャミン・ロウ（Benjamin Law）（以下、ロウ）がインターネットというメディアを通じて発信するナラティブに光を当てる。ロウは、現在オーストラリアの公共放送局のABCラジオで“Stop Everything!”という番組のプレゼンターを務めているほか、雑誌コラムも定期的に執筆しており、メディアへの露出も多いアジア系オーストラリア人である。オーストラリアでアジア人として育った彼が、インタビューというコミュニケーション形式の中でナラティブを通して、自らのアイデンティティをどのように表出し、構築していくのかを分析する。インタビューの中でどのような言語ストラテジーが用いられ、どのようにアイデンティティがディスコース的に構築されているのかを詳細に分析するために、Bamberg（2004）が提唱するポジショニング理論を用い、データを3つのレベル（レベル1, 2, 3）から分析する。また、その際、批判的ディスコース分析（以下、CDA）の観点も援用する。

2. 研究の意義

現在のオーストラリアは、「多文化社会」を標榜しているが¹、西シドニー大学の調査では、国民の一角が人種差別主義者だという結果が

¹ マルコム・ターンブル前首相は“Australia is the most successful multicultural society in the world”と、2017年3月に発表した新たな多文化政策“Multicultural Australia—United, Strong, Successful—”の冒頭であらためて明言している。

出ている (Dunn et al., 2011)。人種差別は、何もアジア人に限られたものではなく、オーストラリアの人種差別の歴史を紐解けば、アボリジナルの人々から始まり、アイルランド人、中国人、そしてギリシャ人など南欧出身者へと差別の対象は時代によって変遷している (グラスビー, 2002)。しかし、アジア人がその容姿ゆえに一際目立つことは否定できない。国は異なるが、カナダではアジア系をはじめとする非白人エスニック・マイノリティーを「可視的マイノリティー」(visible minority) と公的ディスコースで呼んでいるほどである²。つまり、アジア系オーストラリア人にとって、アイデンティティは、常に意識せざるを得ない問題のはずである。

また、社会における支配グループの権力基盤を形成するリソースのひとつに、世論をコントロールできるメディアなどの公的ディスコースへの優先的な「アクセス」が挙げられるが (van Dijk, 1996 : 102)、ロウのような移民第二世代といえ、英語に堪能で、専門職につき、SNSやTwitterを含めたメディアへのアクセスも可能で、自らの声を社会に向けて発信する術を手に行っているといえる。家庭では両親の母国語と文化に触れ、学校や社会においては英語を話し、常に社会の主流派とエスニックの世界を行き来して育ってきた彼らは自分自身のアイデンティティをどのように捉え、それをどのように他者に提示し、どのように他者と交渉しようとするのだろうか。移民二世にとってのアイデンティティは、両親の出身国とホスト国のどちらを選択するかという単純な問題ではないはずである。これまでにvan Dijkをはじめとする主要なCDA研究家によって移民第一世代を対象にした研究が多数報告されてきたが、時代が進んだ今、あらたに移民二世を対象にアイデンティティ研究をするという点で本研究には意義があると考えられる。また、ナラティブ研究に用いられるポジショニング理論に今回

² カナダでは雇用均等法により “visible minority” を “persons, other than Aboriginal peoples, who are non-Caucasian in race or non-white in colour” と定義している。https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2006/ref/dict/pop127-eng.cfm (最終アクセス 2018年9月18日)

CDAの分析観点を加えることで、より詳細な語彙分析や表象の仕方の分析が可能となる。

3. 理論的背景

3.1 スモール・ストーリー

初期のナラティブ研究は、Labov and Waletzky (1967) やLabov (1972) などに代表される。Labov and Waletzky (ibid.) は、話者が自身で経験したテーマについて独話した談話の構造を分析し、ナラティブは、「要約 (abstract)」、「導入 (orientation)」、「複雑な行為 (complicating action)」、「評価 (evaluation)」、「解決 (resolution)」、「終結 (coda)」という基本構造を持つことを明らかにした。初期のナラティブ研究では、ナラティブは、語り手が時系列に沿って一貫して過去の出来事を独白する物語として考えられていたため、「相互行為」という観点が欠けており、ナラティブの内容そのものに関心が向けられることもなかった。しかし、近年ではナラティブは語り手によってだけでなく、その場の相互行為によって作り上げられるものとして捉えられるようになり (ホルスタイン・グブリアム, 2004)、さらに、基本構造 (canon) を持つ「ビッグ・ストーリー」だけでなく、構成要素がすべて揃わない基本から逸脱したナラティブである「スモール・ストーリー」の研究もさかんになりつつある (秦・岡本, 2013)。スモール・ストーリーは、会話のやりとりの中で立ち現われ、そこで語られる内容、形式ともにその会話に埋め込まれていることから、その内容と構造の両側面において「スモール」であるとされる (有田, 2013: 226)。Georgakopoulou (2007: 31-60) は、20時間に及ぶ会話を分析した結果、スモール・ストーリーを (1) 未来や仮定の出来事に関するもの (projections), (2) 共有しているストーリー (shared stories), (3) 最近の出来事あるいは面白い出来事に関するもの (breaking news), (4) その他、の4つに分類している。スモール・ストーリーは、ナラティブ行動の全域を捉える包括的用語として定義され、アイデンティティ研究において重要とされている (Bamberg

and Georgakopoulou, 2008)。

本論で扱うインタビューは、司会者とインタビュー어의短い受け答え、ナラティブ、そしてナラティブに立ち現われるスモール・ストーリーで構成されるが、本論では、スモール・ストーリーをその他の部分と関連づけながら分析する。

3.2 ポジショニング理論

本論ではポジショニング理論を用いるが、ポジショニングとは、Davies and Harré (1990) が提唱した相互行為における自己とアイデンティティ構築の概念である。この概念をさらに相互行為研究に導入したのがBamberg (1997) であり、ナラティブを相互行為としてのトーク (talk as interaction) として捉えている。彼は、ポジショニング理論とLabov and Waletzky (1967) に代表される伝統的なナラティブ分析の手法を関連づける目的で、ポジショニング理論のストーリーテリング分析への応用を生産的に試みている (Bamberg, 1997 : 36)。

ポジショニング理論では、相互行為における参与者間の関係性を「ポジション」という概念を用いて捉える。ここでいうポジションとは、インタビューの場における司会者とインタビューーや、問診における医者と患者のような社会から与えられる役割や機能を表すものではなく、刻一刻と変化する相互行為における動的な立ち位置をさす。参与者は、常にお互いにポジションを表明し合い、交渉し合いながら相互行為を達成していく。インタビュー・データを3つのレベル (レベル1, 2, 3) から分析し、語り手や聞き手のポジションを明らかにすることにより、語り手や聞き手が表出し、(再)構築していくアイデンティティや自己を分析することができる。

Bamberg (2004 : 335-337) を基に各レベルについて概説すると、まず、レベル1は、物語の世界である。このレベルでは、物語の中で使用される言語装置に注意を払いながら、語り手が他の登場人物との関係において、自己をどのように位置づけているかなどを分析し、物語のテーマを明らかにする。たとえば、物語の中でアジア系オースト

ラリア人の「私」が兄弟姉妹と交わすたわい無い会話では、何がテーマとなっており、どのように兄弟姉妹（登場人物）が関わり合い、どのように彼らが位置づけられているのかに注目する。

レベル2では、インタビューという相互行為の場において、インタビュイー、司会者、マイクを向けられた聴衆が相互に関係性を築いていくのだが、語り手であるインタビュイーが自分自身を司会者や聴衆にどのように見られたい、理解されたいと思っているのか、自分自身をどのように位置づけているのかと同時に、司会者や聴衆によって語り手がどのように位置づけられているのかも言語的要素から分析・考察できる。また、相互行為のある時点で、なぜ語り手が会話のターンを取り、スモール・ストーリーを語ったのかについての考察もこのレベルで行う。

レベル1, 2を経て、語り手は徐々にポジションを構築していくが、レベル3では、その場、その時の会話の場面を越えて成立する「自分とは何者か」（“Who am I?”）という問いに答えようとする。そこで、語り手のポジションが文化的ディスコースや規範的ディスコースと照らし合わせて、それらを尊重するものなのか、中立的なのか、距離を置いているのか、批判的なのか、覆すものなのか、抵抗するものなのかを分析し、語り手が自己やアイデンティティをどのように位置づけているのかを解釈する。

このように3つのレベルで分析することで社会の中で語り手が指向する自己の位置づけが明らかになる。尚、本論では、一時的な立ち位置は「ポジション」、機能や関連性の面などから捉えたより包括的な「自分とは何か」を表すものを「アイデンティティ」と呼ぶことにする。

3.3 CDA

本論では、CDAの観点も分析において援用したい。CDAとは、ディスコースをコミュニケーションの基本単位としてとらえる批判的な言語学上の研究方法をさしている（Wodak and Meyer, 2009）。社会の中には、当然とされているものの見方や、考え方が存在する。例えば、

エスニック・マイノリティーについてよく言われるディスコースを挙げると、「言語、宗教、文化、生活様式が異なること（“difference”）が原因でエスニックとホスト社会のメンバーとの軋轢が起きている」や「社会が移民で溢れ返っている（“swamped”）」などがある³。そして、メディアによって特定のエスニック・グループと麻薬取引などの組織犯罪や、テロリストなどを関連づけるような報道がなされるたびに、社会の主流派は報道を事実として鵜呑みにし、結果、マイノリティーに対して否定的なディスコースが流布していく。一方、エスニック・マイノリティーたちは、このような考え方を当然視しない。彼らにしてみれば、マイノリティーを社会の周縁に追いやり、不平等な地位に貶めるような考え方なのである。こうした社会で当たり前とされ、「前提」とされている考え方がディスコースの中でどのように構築され、どのようにして伝えられているかを暴き、明らかにするのがCDAの考え方である。

Krzyżanowski and Wodak (2007: 101) は、ある者を包摂し、ある者は排除しようとするディスコース戦略は、主流派だけでなく、社会における排除の受け手側である移民によっても用いられると述べている。つまり、マイノリティーに属するロウの発言も、オーストラリア社会の主流派の人たちに対して、何かを訴えるためのディスコース的な戦略である可能性があり、CDAで分析することによって、そうした彼の隠れた意図を明らかにできることを意味する。

本論では、特に語彙や社会的行為者 (Social Actor) の分析を通して、ロウの主張の明確化を試みる。

4. 先行研究

唐津 (2011) は、Bamberg (2006) のポジショニング理論を用いて日常会話のストーリーテリングを分析し、社会的行為者（つまり登場

³ van Dijk (1996: 98) は、“swamped”を保守層の人種差別主義者が移民について語る時の常套句であると分析している。

人物)の立場を位置づけたり、評価態度を示す語彙や文法表現が、語り手のアイデンティティの構築を考察するための重要な手がかりとなりうることを示した。

また、Hatoss (2012) は、Schiffrin (2006) の研究をもとに、スーダン系オーストラリア人のアイデンティティのディスコース的構築をポジショニング理論で分析している。Schiffrin (2006:208) は、ポジショニングは、語り手が語ったこととの関連から、語り手のアイデンティティの解体を分析するためのディスコース的装置であると定義づけている。Hatossの研究では、14人のスーダン系オーストラリア人に「もしも、あなたが『どこの出身ですか』という質問を受けたらどのような対応をしますか」というトピックでインタビューを行い、14人それぞれの回答を分析し、どのようなアイデンティティが表出されているのかを明らかにした。結果、スーダン系オーストラリア人は、エスニシティでアイデンティティを表明するなど、強い民族意識を持ちながらも、同時に“outsiders” (p. 65) という本人の意思に反してオーストラリア社会から与えられるアイデンティティに不満を抱いており、「オーストラリア人」としてのアイデンティティ獲得への強い欲求も持っていることがわかった。Hatossの研究は、ディスコースとアイデンティティには複雑に内的に絡み合った関係があり、多文化や多民族間コンテクストにおけるアイデンティティ研究にディスコース分析が有効であることを証明したといえる。

Krzyżanowski and Wodak (2007) は、CDAの中でも特にDiscourse Historical Approach (DHA) の分析手法で、ヨーロッパに移住した移民のアイデンティティを明らかにした。その際に援用した概念が帰属のモードである。帰属のモードという用語は、Sicakkan and Lithman (2005) から借用しており、“a way to capture the endless variety of attachment to places, groups, cultures, etc.” (場所, グループ, 文化に対する数多ある愛着の種類を捉える方法) (2005: 27) と定義されている。Krzyżanowski and Wodak (2007) が、(a) 一時的な愛着 (attachments), (b) 様々な帰属意識 (belonging), (c) 法的なメンバー

シップ (membership) の3種の帰属のモードを用いて分析した結果、移民のホスト国への帰属やホスト国でのアイデンティティを求める気持ちは、永住権や市民権といったさまざまなメンバーシップの構造的條件に阻まれ、ホスト国への帰属は非常に制限されたものとなっていることが浮き彫りになった。

先述のHatoss (2012) の研究では、分析対象となっているディスコースが短く、一面的なアイデンティティしか見ることができなかったと言える。また、Krzyżanowski and Wodak (2007) は、移民第一世代を分析対象としていた。本論では、アジア系オーストラリア人を例に、移民第二世代がどのようなアイデンティティを表出するのかを明らかにすべく、ポジショニング理論とCDAを用いて分析を試みたい。また、司会者や聴衆もインタビューと同じく意味内容構築の参与者であると捉え、彼らのディスコースも分析対象とする。

5. 分析対象データの詳細

5.1 ベンジャミン・ロウ

本論の分析対象者は、ブリスベンやシドニーを拠点に執筆活動をしている作家でありコラムニストであるベンジャミン・ロウである。

ロウは、1982年にクイーンズランド州サンシャイン・コーストのナンボーで生まれたが、当時のサンシャイン・コーストは完全な白人社会であり、アジア系移民の存在はごく稀であった。1990年代になると当時破竹の勢いで支持を拡大していた極右政党のワン・ネイション党がサンシャイン・コーストにも活動拠点を置くようになり、同党が掲げるアジア人排斥ディスコースが地域社会に拡大する中、多感な時期を過したといえる。

2011年にロウの母親を中心に繰り広げられるユーモラスな家族のエピソードを綴った作品*The Family Law*を出版すると、たちまちAustralian Book Industry Awards (ABIA) の*Book of the Year*ほか3部門で候補に上がり、2016年にはテレビドラマ化された。

また、2017年には国際人種差別撤廃デー⁴（オーストラリアでの呼称はハーモニー・デー）に当たる3月21日にオーストラリア政府が人種差別禁止法（RDA）18C⁵の改正に向けた取り組みを始めると発表すると、ロウはいち早くツイッターを用いて18C改正反対運動を開始した。“To celebrate the Coalition tampering with the RDA on #HarmonyDay, let’s share stories of racism with hashtag #FreedomOfSpeech”.（連立政権がハーモニー・デーに人種差別禁止法に手を加えることを祝して、「ハッシュタグ・フリーダム・オブ・スピーチ」で人種差別の経験談を共有しよう）と政府に対する皮肉を込めてツイートすると、この“#FreedomOfSpeech”は、瞬く間にインターネット上に拡散した。ロウのツイッターによる18C改正反対運動は、国内メディアだけでなく英紙ザ・ガーディアン（*The Guardian*）でも取り上げられた⁶。

アジア系オーストラリア人二世のロウを分析対象に選んだ理由は、こうした彼の生い立ちと彼の社会的認知度だけではない。ロウは、一見問題なくオーストラリア社会で主流化を果たした移民二世の代表格のようでありながら、人種差別問題には声を挙げて反対するという一面も持ち合わせており、彼の心情の複雑さを分析で明らかにすることは、白豪主義の廃止からもうすぐ半世紀を迎えるオーストラリアにおける移民二世の心情を知るひとつの方法になると考えたからである。

尚、ロウは同性愛者であることを公言しているのだが、今回の研究

⁴ 1960年3月21日に南アフリカ共和国で起きた“Sharpeville massacre”事件を受け、1966年に国連が制定した。オーストラリアは、ハーモニー・デーとして多文化を祝う日と定めている。

⁵ 正式名称は“Racial Discrimination Act 1975, Part II A Section 18C”で、人種、皮膚の色、または民族的・国民的出自を理由に行われる個人または集団に不快感を与え（offend）、侮辱し（insult）、屈辱を与え（humiliate）、脅迫する（intimidate）合理的な恐れがある公的な行為を禁止している。オーストラリアでは近年同法の改正や廃止が議論されてきた。詳しくはAustralian Human Rights CommissionのHPを参照されたい。

⁶ The Guardian, March 21, 2017. “#FreedomOfSpeech: Twitter shares stories of racism in Australia” <https://www.theguardian.com/australia-news/2017/mar/21/freedomofspeech-twitter-shares-stories-of-racism-in-australia>（最終アクセス 2018年8月28日）

は、多様なエスニシティが存在する移民国家のディスコースの分析を目的としているため、エスニックな視点でのみアイデンティティを捉えることにし、ジェンダー的視点は含めない。

5.2 インタビューのトピック

本論で利用した音声・映像データは、メルボルンのザ・ウィーラー・センター⁷ (The Wheeler Centre) で2012年3月6日に行われたライブ・インタビューを収録したもので、同センターのウェブ上で公開されている⁸。インタビューでは、Alice Pung編著のアンソロジー(選集) *Growing Up Asian in Australia* (2008) の寄稿者としてロウが紹介され、本のタイトルと同じ『オーストラリアでアジア人として育って [筆者訳]』というテーマで行われた。

インタビューは、収録時間約46分で、司会者のアンドリュー・マクドナルドがトピックを導入する形式となっているが、終盤の質疑応答では、聴衆と対話する形式が取られている。トピックは自然な流れで移行しており、トピックが必ずしも明示されている訳ではないが、本論では便宜上、以下の表1のようにまとめている。紙幅の都合上、本論の分析では特にスモール・ストーリーの使用、ポジションの変化、およびアイデンティティの表出が目立ったグレーに塗られた項目のみを6.1から6.6節で扱う。

表1 インタビューに現れたトピック (分析対象のトピックはグレーで表示)

項目	本論の節	トピック
1	6.1	ロウの紹介
2	6.2	マイノリティーとしての十代

⁷ ビクトリア州立図書館内に併設されている出版センターで、“Texts in the City” というイベントを定期的に開催している。

<https://www.wheelercentre.com/events/growing-up-asian-in-australia>

⁸ <https://www.wheelercentre.com/broadcasts/texts-in-the-city-growing-up-asian-in-australia> (最終アクセス 2018年9月30日)

3		香港のテレビドラマのダビング・テープ
4	6.3	他のアジア人との差別化を意識した十代
5		アジア人のステレオタイプ
6		学校でのいじめ—いじめに遭った従妹と免れた自分—
7		アジア人としての自覚はいつ芽生えたか
8		広東語が話せないことへの罪悪感
9		思春期の親と子の確執とアイデンティティ
10		2012年のアジア系オーストラリア人
11		アジア人であることで家族は孤立したか
12		アジア系移民の両親は良い学業成績を期待したか
13	6.4	聴衆が抱くアジア人のステレオタイプ
14	6.5	現代オーストラリアにおけるアジア人とは
15		同性愛者であることによって家族に亀裂が生まれたか
16		アジア人という総称にどれほど満足しているか
17		アジア系オーストラリア人と呼ばれる方が違和感はないか
18	6.6	オーストラリアへの強い帰属意識
19		両親は異なる文化に適応するのに苦労したか

6. 分析

6.1 ロウの紹介

インタビューは、司会者によるロウの紹介から始まる。

[Excerpt 1] [0:17-1:21]

司会：…today we are lucky enough to be studying the book *Growing up Asian in Australia*, edited by the wonderful Alice Pung, it's an anthology of essay, articles and stories by Asian Australians…

Benjamin is a writer, a commentator and his work has appeared in (1) many places including *Frankie*, *The Monthly*, *Cleo*, *Crikey*, *The Big Issue*, *The Griffith Review*, (2) is that enough?

ロウ：(3) Yeah, that's enough.

司会：Ok, that's enough.

[Excerpt 2] [1:57-2:26]

司会：… (4) How did you first get involved with the project?

ロウ：um, I'm signed up to a lot of mailing list…a lot of my friends are obviously writers. So: there was a call out for submission from Alice Pung. There was an anthology coming out called *Growing up Asian in Australia* and I write full-time and I just thought that title, like (5) “Growing Up an Asian in Australia like, THAT’S ME!” (6) So, obviously I had to contribute and I knocked up some stories…

([]の数字はタイムカウント、下線は分析の該当箇所、以下同様)

導入部のExcerpt 1は、「紹介ディスコース」であり、司会者は、ロウを「権威ある作家」として聴衆に紹介している。雑誌や新聞への寄稿を(1)“many”を用いて数量化し、多数あることを強調したうえで、アジア系移民に読者が特化されたような新聞・雑誌ではなく、一般的に主流派の白人も購読者層となっている新聞・雑誌名を挙げることで、「白人」、「アジア人」という括りに関係なく、「成功している作家」としてロウを表象している。こうした司会者によるアイデンティティ構築の戦略は、以降のロウの発言に正当性や信頼性を与える効果がある。また、司会者の(2)“…is that enough?”(これくらいで良いでしょうか)という発言は、「こういった質・量の紹介で良いでしょうか」という確認行為であり、それに対し、ロウは(3)“Yeah, that’s enough”(十分です)と了承しており、「オーストラリア社会で人気の作家・コメンテーター」というロウのアイデンティティが両者によって共同構築されていることがわかる。

Excerpt 2では、司会者の(4)“How did you first get involved with the project?”(どういう経緯でアンソロジーのプロジェクトに加わることになったのですか)という質問に答える形で、ロウのナラティブが展開する。その中(レベル1)において登場人物のロウは、(5)

“Growing Up an Asian in Australia like, that’s me!”（オーストラリアでアジア人として育つ、これはまさに私だ）という自身の心内発話の直接引用によって、「アジア系オーストラリア人」というアイデンティティを積極的に表明している。そして、フルタイムの作家として、(6) “So, obviously I had to contribute”（当然、寄稿しなくてはならないと思った）とアリス・ブン編集のアジア系作家達によるアンソロジーへの寄稿の理由を述べているが、これも司会者や聴衆に向けた「オーストラリア育ちのアジア人作家」としてのアイデンティティの表明であり（レベル2）、こうして、ロウの「アジア系オーストラリア人作家」としてのアイデンティティが徐々に構築されているのがわかる（レベル3）。

6.2 マイノリティーとしての十代

続いて、司会者のアンドリュースは、今回の本の着想をどこから得たのかを尋ねる。

[Excerpt 3] [4:04-5:53]

司会： Was there anything like that, okay, at your school or on your kind of studying this when you were growing up, okay, (7) where could you go for an insight into growing up a or being Asian in Australia?

ロウ： (8) NOWHERE, actually. …but I think NOW looking back I was trying to write the type of stories I would have wanted to read as a teenager and I didn’t find those stories anywhere. (9) I DO remember though I grew up in a place called um KAWANA on the Sunshine Coast in Queensland, really surfy and beachy just like me. No @. I was (10) a total book nerd so (11) I DIDN’T FIT AT ALL. And I would always especially as a teenager oh just spend a lot of time at my local library. You know, it’s free, free books, fantastic.

And they had just released around that time the film version of a BOOK called *The Joy Luck Club*. And you know as a young teenage boy for some reason this movie about Asian-American women really resonated for me. (12) I found myself very moved by it. (13) I still cannot watch that film without crying. It's really pathetic. And so I found out that this film *The Joy Luck Club* was based on a book by Amy Tan and she actually released a lot of novels by that stage about this experience of growing up ASIAN-AMERICAN. And of course Amy Tan comes from a different country. She's from a different generation but those THEMES about (14) NOT QUITE GETTING YOUR FOLKS, THEY RESONATED WITH ME about (15) NOT QUITE LOOKING OR FEELING the same as everyone else. (16) I totally got that and that was probably the first time (.) (17) I felt that's a voice I identify with.

まず、レベル2において、(7) “where could you go for an insight into growing up a or being Asian in Australia?” (執筆にあたり、アジア人として育ったこと、あるいはアジア人であることについて書く着想はどこから得たのか) と司会者は尋ね、ロウの「アジア人」としての生い立ちや過去にまつわる話などを期待する。しかし、ロウは、(8) “Nowhere, actually. …but I think now looking back I was trying to write the type of stories I would have wanted to read as a teenager” (ただ単に自分が十代の頃に読んでみたかった類の本を書いただけだ) と答える。つまり「アジア人」であるがゆえの経験ではなく、人種に関わらず誰もが経験する「一般的な思春期の感性」が本の出発点であると主張しており、ここに司会者とロウの間に「オーストラリア育ちのアジア人」というテーマに対するポジションのずれが生じているのが確認できる。司会者は「アジア人のロウ」としてのポ

ジョンを確認しようとするものの、ロウはこの時点ではそれに応じない。

しかし、この後、ロウは (9) “I do remember though…” (でも、よく覚えているのは) と過去の経験のナラティブを始め、そこからポジションが変化する。ロウは、サーフィンが盛んで、ビーチが多く点在するサンシャイン・コーストのカワナで育ったが、自分は (10) “a total book nerd” (完全に本の虫) だったため、土地柄に (11) “I didn’t fit at all” (全く馴染んでなかった) と “not ~at all” というモダリティーを表す表現を用いて否定を強調し、「浮いた存在」としての自分を表象する (レベル1)。そのうえで、映画 *The Joy Luck Club* (1993) との出会いを語り始める。*The Joy Luck Club* は、中国系アメリカ人であるエイミー・タン (Amy Tan) 原作の映画で、アメリカに移住した中国系アメリカ人女性たちとアメリカで生まれ育ったその娘たちの絆を描いた作品である。ロウはその映画について (12) “I found myself very moved by it” (非常に感動した) と当時の自分の感情を心理過程 (Mental Process) によって率直に語っている。

また、映画に登場するアジア系アメリカ人を (14) “not quite getting your folks” (両親を理解できない), (15) “not quite looking or feeling the same as everyone else” (周囲と見た目も考え方も少し違う) と位置づけ、自分と二重写しにすることで、「見た目や考え方が違うことで苦悶する少年」, 「出身国で生まれ育った移民第一世代の両親と分かり合えない第二世代」としての自らの十代の頃のアイデンティティも表明している。特に, “not quite” (完全には～ない) というモダリティーの再言 (repetition) のレトリックは、ホスト国で生まれ育った移民二世の鋭敏な感受性が、自らと社会の主流派、自らと両親との比較における微妙な差異をいかに鋭く感じ取っていたのかを表明している。

そして、原作者のエイミー・タンについては、(16) “I totally got that” (彼女の気持ちが痛いほどわかった) とモーダル付加詞 “totally” で同調する気持ちを強調し、(17) “I felt that’s a voice I identify

with”（初めて自分と同一視できる感情を見つけた）と当時のアイデンティティに言及している。

つまり、このナラティブを通して、ロウは、司会者と自らのポジションについて交渉を行い、司会者が期待する「アジア系移民」としてのアイデンティティを提示したのである。ロウは、(13) “I still cannot watch that film without crying. It’s really pathetic.”（未だに映画を見ると泣けてしまうほど、とても感傷的だ）と現在時制を用いて「評価」を述べているが、映画を見ることで過去を振り返れば今でも感傷的になる移民二世の心情の表明であり、この揺れる心情の吐露によって、「移民二世ならではの「符合」を持つ人物」としてロウのアイデンティティが構築されている（レベル3）。

6.3 他のアジア人との差別化を意識した十代

司会者は、ロウの父親について言及した後、ロウが寄稿したエッセイ “Tourism” の中に出てくる Dream World というテーマ・パークのエピソードに話題を転換し、司会者とロウが共同でスモール・ストーリーを作っていく。

[Excerpt 4] [7:45-8:24]

司会： Your dad kind of ran a lot of, I don’t wanna say racketeering business either because it’s your story um but (18) he had an Asian grocery at one point. He had a Thai restaurant, um-like-kind of, - all kinds of Asian stereotypes,

ロウ： (19) [Totally.

司 会： [and there is that story in there about the tourism. It does come that kind of great line where you go to the theme park and you and your siblings are like, (20) “We are not Asian tourists, we are not Asian tourists and we are going to do everything we can not to be Asian tourists to distinguish ourselves from the others.”

ロウ：(21) Yeah. (22) We're gonna like wear our pants below our navels. We refuse to have bum bags. We will talk in really thick bogan accents (23) to make sure that everyone knows we are NOT those types of Asian tourists. (24) It's weird what goes on in your head sometimes.

(網掛け部分はスモール・ストーリー、以下同じ)

まず、Excerpt 4の冒頭のレベル2においては、司会者は、(18)“…he had an Asian grocery at one point. He had a Thai restaurant, …all kinds of Asian stereotypes” (ロウの父親はアジア食材店に続き、タイ料理レストランを経営し、アジア人のステレオタイプがすべて当てはまる)と述べ、ロウの父親を「アジア系移民のステレオタイプ」と位置づけている。ロウは(19)“Totally”(全くその通り)と完全な同意を表し、「アジア人のステレオタイプというもの世間には存在する」という司会者が持つ前提 (assumption) と、「父親はその典型である」という位置づけを受け入れている。

司会者はこのイベントに際し、アンソロジーを事前に読んでおり、テーマ・パークへの家族旅行の一節に触れる。(20)“…we are going to do everything we can not to be Asian tourists to distinguish ourselves from the others” (自分たちを他の人達と区別するために、アジア人旅行者にならないようにできる限りのことをする) という本の中にあるロウの台詞を司会者は引用し⁹、ロウたち兄弟姉妹が、アジア人旅行者と間違われまいと必死にふるまっていたというスモール・ストーリーを用いて、「アジア人のステレオタイプを地で行くような父親」と「ステレオタイプと見なされることに抵抗を感じていたロウ」を巧妙に対照化させ、この点に着目するように聴衆を誘導して

⁹ ロウの著書では、次のように記されている。“Once through the gates, we kids would do our best to distinguish ourselves from the actual Asian tourists.” Law, B. (2008) *Tourism*. In Pung, A. (Ed.), *Growing Up Asian in Australia*. Black Inc. [Kindle版] 検索元amazon.com

いる（レベル2）。すると、(21)“Yeah”という応答と共にロウがターンを取り、司会者とロウが共有しているストーリー（shared story）を共同構築していく。

ロウが語る物語世界（レベル1）を見てみると、ロウは自身を「アジア人旅行者のステレオタイプに抗うティーンエイジャー」という位置に置いているのがわかる。まず、(22)“We refuse to have bum bags”（ウエストポーチを使うなどとんでもない、お断りだ）という発話では、“refuse to”を用いて強い拒否を表わしており、また、“wear our pants below our navels”（ジーンズを腰の低い位置で履く），“We will talk in really thick bogan accents”（強い訛りのあるオーストラリア英語で話す）は、アジア人旅行者がたくさん周囲にいる中で「オーストラリア人の若者」としての表象であり、自分のアイデンティティの強烈なアピールであると理解できる。

裏を返せば、このストーリーの中でのアジア人旅行者の典型は、「ウエストポーチを着用」し、「ジーンズを腰の高い位置で履く」、「英語以外の言語か、強い外国語訛りの英語を話す」人たちのことである。さらに、(23)“to make sure that everyone knows we are not those types of Asian tourists”（僕たちが、そういった類のアジア人旅行者でないことと皆にしっかりとわかるように）という台詞からは、ロウは「アジア系オーストラリア人」である自分たちと「アジア人旅行者」を明確に区別していることがわかる。さらには、アジアといっても様々な国があるにもかかわらず、それらの国々から来る旅行者を「アジア人旅行者」とひとつの枠組みで捉えている。ロウは自分たち以外を「アジア人旅行者」と関連化¹⁰したうえで、「服装」と「言語」の側面から「恰好が悪い」、「スマートではない」という否定的評価を下していることがわかる。

ロウは、アジア人の両親を持つが、特に同じアジア人だからという

¹⁰ このように一定のグループとして名付けられていないにもかかわらず、社会的行為者たちを関連づけて表象する戦略を関連化（Association）という（van Leeuwen, 2008 : 38）。

理由で旅行者に親近感を持つことはなく、むしろ、彼らを前にすると、自分たちの持つ「オーストラリア人」というアイデンティティをより強く意識したようである。ロウは、自分たちの取った行動について、(24) “It’s weird what goes on in your head” (何を考えていたのだか)と述べているが、「アジア系オーストラリア人」としてアイデンティティが既に確立された余裕から、一歩下がって過去の自分を俯瞰しているともいえる。ここでのスモール・ストーリーは、過去においては、いつも周囲に注意を払っていなければ、「彼ら (they)」の中に紛れて、ただの “one of them” となってしまう恐怖感、いわばアイデンティティの危機感をいつも抱いていたことを示すものであり、今では「アジア系オーストラリア人」として生きていけばよいのだ、といわば達観した心理と態度が読み取れる (レベル3)。

6.4 聴衆が抱くアジア人のステレオタイプ

インタビューの終盤は質疑応答形式となり、聴衆が質問をし、ロウが応答する。

[Excerpt 5] [33:01-34:15]

聴衆：(25) So, just growing up Asian

ロウ：(26) mm

聴衆：(27) What do you think had more effect on you like the outlook that society had upon you as being an Asian (↪) - or the expectations of your parents to be Asian?

ロウ：(28) to be Asian YE:AH hm- \$ (29) that’s a tricky [question

司 会：(30) [did you, did you play up to the stereotypes (↪) the Asian stereotypes (↪) - that kind of socially or your non family environment?

ロウ：(31) LOOK, this question actually reminds me of something (…)
actually both of these questions remind me of something weird
that my siblings did a couple of years ago (↪) - there were

five of us. so you can sort of – we can sort of rank each other in surveys - and we did this survey called - WHICH SIBLING IS MOST ASIAN?

聴衆：(32) @

ロウ：(33) and there were ten criteria - so there were staff like um- how much do you hold on to Asian values – (34) how much do you like Asian food- how much how good are you at cooking Asian food- (35) how well do you speak Cantonese – (36) how many Asian friends do you have -um- (37) how attracted are you to Asian people - how ATTRACTIVE are you to Asian people? And we ranked each other on one two three four five -um- on an ascending scale- (38) and it turned out that my younger sister Tammy is the most Asian just you know and-

レベル2において質問者は(25)“So, just growing up Asian”（あなたはアジア人として育ったわけですが）、と「アジア人」としてのアイデンティティの確認を求め、それに対してロウは(26)“mm”（フム）という間投詞で相槌を打つことで質問者が提示したアイデンティティを了承する。すると、質問者は続けて、(27)“What do you think had more effect on you like the outlook that society had upon you as being an Asian or the expectations of your parents to be Asian?”（アジア人として育ったことで、どんなことがご自身に一番影響したと思いますか。たとえば社会から与えられる将来の展望であるとか、両親からのアジア人としての期待など）と尋ねるが、この質問からは「アジア人ゆえの社会や両親からの期待が、アジア人の家庭には当然存在する」という前提（assumption）が読み取れよう。エイミー・チュア（Amy Chua）の著作で、中国人の母親による厳格な中国式教育を描いた*Battle Hymn of the Tiger Mother*（2011）は、米国で大きな反響を呼んだが、オーストラリア社会にも、中国人の家庭に

対する何らかのステレオタイプは存在するのだろう。

ロウは、(28)“to be Asian”（アジア人としてか）と一言述べてから、一瞬沈黙し、溜息をつき、ただ一言 (29)“that’s a tricky question”（微妙な質問だね）と言う。ロウは質問に対する不満を表明しているのである。すると司会者が進行を促すように、(30)“Did you play up to the stereotypes, the Asian stereotypes that kind of socially or your non family environment?”（アジア人のステレオタイプに甘んじることにはありますか。社会生活で、あるいは家庭の外で）と更に質問する。その質問には、「アジア人のステレオタイプ」という元の質問にはなかった新たな表現が確認できる。ここでは、聴衆の中から選ばれた質問者が勝手なアジア人像をロウに対して抱き、それに符合するエピソードをロウの口から引き出そうとしており、司会者も質問者のそうした意図を理解したうえで、敢えて「アジア人のステレオタイプに甘んじることにはあるか」と聞き直しているのである。するとロウは、(31)“Look, this question actually reminds me of something…my siblings did a couple of years ago. There were five of us. …we can sort of rank each other in surveys and we did this survey called ‘Which sibling is most Asian?’”（ねえ、今の質問で思い出したけど（中略）、2、3年前に兄弟姉妹で遊んだゲームでは、僕ら5人をお互いに格付けしあった。そのゲームの名前は、『兄弟姉妹の中でだれが一番アジア人か』だ）と切り出し、聴衆と司会者からの質問によって思い出したとされるゲームのナラティブを始める。

ロウの発話には、ややストレスが置かれており、スクリプトの下線(32)に見られるように、笑い所であることを理解した聴衆から笑いが起こる。白人オーストラリア人の目には、十分に「アジア人」に映る兄弟姉妹が、互いにどちらがよりアジア人かを競っているというのは滑稽に思われるに違いない。司会者によってアジア人のステレオタイプについて定義づけが行われたわけでもないのに、ロウはこの自虐的ともいえる笑いをとりながら、質問者と司会者の期待を揶揄するかのよう、彼らがいかにも思いつきそうなおきまりのアジア人像を下

線 (33) から (37) で列挙し、アジア人のステレオタイプの共同構築に参加する (レベル1)。

しかし、そのステレオタイプの類例も (33)「どれほどアジアの価値を維持しているか」や (35)「どれだけ上手に広東語が話せるか」は、本質的なものであるといえるが、それ以外の (34)「どれほどアジア料理が好きか」、(36)「どれだけアジア人の友人がいるか」、(37)「どれほどアジア人に魅かれるか、どれほどアジア人を魅了しているか」などは末梢的なものに過ぎない。しかも、最終的に「ロウが最もアジア的だった」という結論であれば、話は落ち着くのだが、実際は (38)「妹のタミーが最もアジア人だった」という結論となっており、結局は、司会者の「アジア人のステレオタイプに甘んじることはあるのか」という質問に対し、ナラティブを通して「ステレオタイプに甘んじることはない」とロウは間接的に回答しているのである。そして、ナラティブを利用して、「アジア人のステレオタイプから外れた自分」というアイデンティティ構築を行ったわけである (レベル2)。

ここまですら、ロウは、自身が「アジア人」という人種カテゴリーに属することは受け入れながらも、他者によってラベリングされたり、ステレオタイプ化されることに抵抗を感じていることが読み取れる (レベル3)。この後、ロウは会話のターンを維持したまま、話題を「アジア人とは何か」に転換し、さらに持論を展開していく。

6.5 現代オーストラリアにおけるアジア人とは

Excerpt 6は、Excerpt 5の続きである。ロウは聴衆に対して次のような問題提起をする。「『私はどれくらいアジア人らしいか』と常に自問自答するのは、アイデンティティに対する自己意識が高じているからであるが、そもそもオーストラリアというコンテキストにおいて、アジア人とはどういう意味を持つのかという新たな疑問が湧く。それは実は非常におもしろい問いだ。」

[Excerpt 6] [34:15-35:09]

ロウ : but- but- that's- that's sort of things like you are a little bit self-conscious about-about your identity and you are constantly questioning - HOW Asian am I ? or am I Asian enough? and THEN that built into another question which is wh-wh- what does Asian actually MEAN ? - um and in an Australian context- that's um that's a really interesting question as well -because (39) I think - most Australians in some ways are some sort of hyphenated Australian whether you're an Indian Australian or a Greek Australian, (40) you know John Howard famously said he doesn't believe in hyphenated Australians (41) but I think - all of us are hyphenated in some ways you know - we're parents or we're kids or we're fans of some particular music artists and we've got an ethnic background like (42) we are all - jumbled really yeah. (43) thanks for your question-it's a good one.

ロウは、(39) “I think most Australians in some ways are some sort of hyphenated Australian whether you're an Indian-Australian or a Greek-Australian” (私が思うに、ほとんどのオーストラリア人は、インド系オーストラリア人やギリシャ系オーストラリア人のようにハイフンがついている) と述べた後、(40) で “you know, John Howard famously said he doesn't believe in hyphenated Australians” と権威者 (authority) である自由党のジョン・ハワード元首相を指名 (Nomination)¹¹したスモール・ストーリーを挿入している。ハワードは、パシフィック・ソリューション¹²に代表され

¹¹ 社会的行為者がその名前では象徴されることを指名 (Nomination) という (van Leeuwen, 2008 : 40)。

¹² 2001年発足の第3次ハワード政権の難民政策で、ボートで入国を試みた難民認定希望者をオーストラリア本土に上陸させずに太平洋の島国に収容して難民審査を行う政策のこと。

る移民強硬策で知られる政治家であるが、ロウが言及しているのは、2006年にラジオ放送局2UEにHowardが出演した際の以下の発言である。

“It’s not a good idea in this debate to be segmenting the Australian community, we are all Australians, that’s the aim of sensible policy for people to see themselves not as Muslim-Australians or Lebanese-Australians. I don’t like the hyphens too much. I think we ought to try and drop the hyphens and just talk about Australians.”

(John Howard, “*Interview with John Laws*”, Radio 2UE, 15 February, 2006¹³, 下線は引用者)

この頃、オーストラリア議会では、妊娠中絶薬の認可基準を緩和する法案が連日審議されていた。ある自由党議員が法案に反対して、「オーストラリア人は、中絶によって自ら絶滅への道をたどっている」、「やがてオーストラリアはイスラム教徒の国になってしまう」と発言したことが問題となり¹⁴、当時首相であったHowardは、番組司会者からこの件に関して意見を求められたわけである。

Howardの本来の発言は、下線部の通り “I don’t like the hyphens too much” であり、ロウはレベル1の物語世界において、その発言を引用する際に、節を引用する動詞 (quoting verb) には、“say (said)” という中立的な動詞を用いながらも、投射された節 (projected cause) の中のHowardの心理過程 (Mental Process) については、“like”

¹³ <http://pmtranscripts.pmc.gov.au/release/transcript-22130> (最終アクセス 2017年10月27日)

¹⁴ 妊娠初期に使用する妊娠中絶薬、ミフェプリストンの認可基準を緩和する法案の審議で、自由党のダナ・ヴェイル下院議員が発言した。詳しくは下記URLの記事を参照されたい。<https://www.smh.com.au/national/abortion-will-lead-to-muslim-nation-mp-20060214-gdmys8.html> (最終アクセス 2018年10月13日)

の代わりに“believe in”を用いている。“not like”は、「好きではない」, 「良いとは思わない」という嗜好を表す表現にとどまるが, “not believe in”なら「価値を認めない」あるいは, そもそも「存在を信じない」とも解釈できる。「外国系オーストラリア人という表現を認めない, 信じない」という風にハワードの発言を巧妙に歪めることは, ハワードの発言を偏った, 非常に問題のあるものに見せ, 聴衆にハワードの人となりや考え方について疑念を抱かせ, 信頼性を損なわせる効果がある。さらに (40) でロウが用いた“famously”という副詞はハワードを皮肉った表現であり, 実際は“notoriously”の意味で用いられている。この語彙の使用により, ハワードの発言は誰もが知る「悪名高い話」となり, 聴衆は, 一層ハワードに対して否定的な感情を抱くようになるのである。

続けて, ロウは (41) “but I think all of us are hyphenated in some ways” (それでも私たちは皆, ある意味ハイフン付きだ), さらに, (42) “We are all jumbled really, yeah” (私たちはみんなどこかで混ざりあっているのだ) とジョン・ハワードとは反対の主張をする。ここでロウは, 包括的“we”や“all of us”を用いている。フェアクロー(2008: 157) は, “we”は使用の仕方によっては, 聞き手を話し手と同じグループに取り込み, 話し手の視点に立たせて意見に同調するように求める戦略となると述べている。ここでの“we”はオーストラリア国民全体を指しており, ロウは, ハワードに関するスモール・ストーリーとの相乗効果で, 聴衆を自分の見解に同意させようと説得を試みているのである (レベル2)。

ロウは, 途中から論点を「オーストラリアにおけるアジア人とは何か」にシフトさせることで, おそらく日頃から考えていたであろう持論を展開し, 十分に訴えたことで幾分満足感を得たのか, (43) “Thanks for your question. It’s a good one (=good question)” (質問してくれてありがとう。良い質問だったよ) と司会者の代わりに評価づけを行い, やり取りを終了してしまっている。ロウの考えでは, オーストラリアには「白人オーストラリア人」対「アジア系オー

ストラリア人」(they-us)という二項対立は存在せず、どのような人でも必ずエスニックな出自に還元できる多文化社会なのである。また、ハワードの主張する、外国系オーストラリア人という表現をなくして、皆「オーストラリア人」で良いではないかという主張にも反対なのである。なぜなら、それは社会から不当な扱いを受けているエスニックの存在を無視し、人種差別を隠蔽することにつながるからであろう。ロウは、たとえ善意であっても、「“color-blind”（皮膚の色による人種差別や偏見がないこと）を得意気に自称する人は、19パーセントものオーストラリア人が皮膚の色、民族的出自、あるいは宗教を理由とした差別を受けていることに都合よく気づかないふりをしてい」と主張しており、「互いを対等に扱うべきなのであって、皆が同じという事ではない」と別の著書で主張している（Law, 2015：246-247）。

一方、聴衆は質問に対する回答らしい回答を得られないまま、「アジア人とは」という話題に転換されたことをどう感じているのだろうか。そもそも聴衆は、ロウに対して、どのような回答を期待したのであろうか。ここでオーストラリア文学研究に答えを求めたい。オーストラリア文学界においては、1990年中頃からマイノリティー作家（ディアスポラ作家ともよばれる）による作品の人氣が高まってきていた。この現象について、有満（2003）は、故郷イギリスとの絆が断ち切られて久しいアングロ・ケルティック系作家の作品よりも、さまざまな地域出身の作家による多文化を反映させた作品の方が面白いという理由に加え、マイノリティー作品は、文化的「差異」や「符合」を持ち、文学的な価値以上に「本物（authentic）」の「移民の経験についての語り」であることが期待できるからだと説明している。つまり、『オーストラリアでアジア人として育てて』のイベントに集まった聴衆も同じく、「アジア人」であるロウに、文化的「差異」や「符合」、「本物の移民二世ならではの体験」を期待したのではなかろうか。そして、ロウは見事にその期待を裏切ったのである。アジア系移民には、黄禍論に続き、（主に中国人に対する）チンク（Chink）という

蔑称などで汚名を着せられてきた過去がある。ロウは、現在では「アジア人」という表現に何ら否定的な含みはなく、「アジア」とは地理的なくりに過ぎないと訴える一方で、多文化社会を構成するさまざまなエスニックの中の「アジア人」というアイデンティティを構築しているのである（レベル3）。

6.6 オーストラリアへの強い帰属意識

さらにロウのアイデンティティに関する質問が続く。

[Excerpt 7] [41:05-42:48]

聴衆： Sorry, me again. In terms of belonging within the anthology where do you feel like- you -belong - the most? Do you think that you can fit in Hong Kong - where like you were talking about before - or do you feel that -um- that is Australia that you resonate most with or [(…)]

ロウ： [if I'm going from country to country where do I feel most comfortable?

聴衆： yeah.

ロウ： (44) AUSTRALIA, DEFINITELY like I- (45) I've spent most of my life in Australia- (46) I was born in Australia (47) I was born in NAMBOUR(↗) - you know that's where Kevin Rudd was born

聴衆： #

ロウ： um - (48) you have to pronounce it like that (↗) - when you get there as well (↗) - and you know because I- (49) I come from Brisbane - (50) I come from Queensland - and generally there are more bogans there (51) so there is this inner bogan in me all the time that I carry - (…)] as much as my Asian heritage and I don't think that - they're completely distinguishable -um- or apart from each other they inform

each other as well - like you go far north Queensland and there are (52) the most bogan Asian Australians you will ever meet -you know like shorts scratching themselves and it's amazing. It's awesome. (53) so- I think you know - people- people sometimes -a:sk do you see yourself more Asian or more Australian and I'm and (54) for me that that question - is almost asking-um- there's someone who might be a teacher and a mom and a wife- 'do you see yourself more as a wife or a mom or -or a teacher?' you know? (↪) that (55) you are all of those things and those things are actually interact with each - other as well I think when you're when you're the minority - you're-you're in any way whether you're a gay or whether you're an ethnic minority you're forced to think about identity more -

聴衆からの質問は、「どの国に最も帰属意識を感じるか」という内容であり、口ウは躊躇なく(44)“Australia, definitely”(断然オーストラリアです)とモーダル付加詞“definitely”を用いながら断言し(categorical assertion), また音声的にも強調して回答している。(45)“I've spent most of my life in Australia”(人生のほとんどをオーストラリアで過ごしてきた)や(46)“I was born in Australia”(私はオーストラリアで生まれた)は、オーストラリアとの社会的つながりを根拠としたアイデンティティの表明であり、オーストラリアに愛着と帰属意識があることがわかる。さらに(47)“I was born in Nambour, you know, that's where Kevin Rudd was born”(私はナンボー生まれで、ケビン・ラッドと同郷だ), (49)“I come from Brisbane”(私はブリスベン出身です), (50)“I come from Queensland”(私はクイーンズランド州出身です)と次々と「オーストラリア人」としてのアイデンティティを表出していく(レベル2)。

スモール・ストーリーでは、自分の出身地がナンボーであり、労働

党のケビン・ラッド元首相と同郷だという事実に触れている（レベル1）。6.5のスモール・ストーリーは、ハワードを指名（Nomination）し、彼の政治的主張を真っ向から否定するために用いられていたが、ここでの狙いは、ラッド元首相の名前を挙げることによって、聴衆にナンボーに対する親近感を持たせることであろうと推察できる。また、おそらくロウの彼に対する親近感も理由に挙げられよう。労働党は、自由党と比較すると伝統的に移民に寛容であったうえ、ラッドはオーストラリア国立大学（The Australian National University）で中国語を専攻しており、流暢な標準中国語も話せることで知られている。外務省時代には、在北京オーストラリア大使館に赴任した経歴もあり¹⁵、現在はアジアソサエティ政策研究所長（President of the Asia Society Policy Institute）として米軍などで米中関係の講演を行うほどのアジア事情通である¹⁶。そのようなラッドと同郷であることを紹介しつつ、(48)“You have to pronounce it like that when you get there as well”（現地ではこう発音しなくてはならないよ）と、ロウはナンボーの発音の仕方について聴衆にレクチャーする。ここにはサンシャイン・コーストのスピーチ・コミュニティ（Gumperz, 1968）¹⁷の一員としてのアイデンティティが強烈に表明されている。6.3のExcerpt 4にも(22)“talk in really thick bogan accents”とあったように、ただ英語を話すというだけでなく、クイーンズランド州の独特のイントネーションで英語が話せるという特殊な言語能力が備わっている自分をアピールしており、都市に住むオーストラリア人以上にことクイーンズランドに関しては事情通であり、クイーンズランドの住人（Queenslander）としてのアイデンティティがここに構築され

¹⁵ <http://primeministers.naa.gov.au/primeministers/rudd/before-office.aspx>（最終アクセス 2018年9月22日）

¹⁶ 『読売新聞』2018. 11. 2 朝刊 2面

¹⁷ Gumperz (1968: 381-6) は、いかなる人間の集合体も、その集合体で共有される言語的サイン（verbal sign）を使用して、常に、そして頻繁に相互行為を行っているとし、この集合体をスピーチ・コミュニティと呼んでいる。それぞれのスピーチ・コミュニティ間には、言語使用法（language usage）に大きな差異が見られる。

ている。また、ロウは (51) “There is this inner bogan in me all the time that I carry (….) as much as my Asian heritage” (アジア人であると同時に自分の中にいつでも “bogan” な部分がある) と語っているが、“bogan” は、マクォーリー辞書¹⁸によると、以下のように定義されている。

“a person, generally from an outer suburb of a city or town and from a lower socio-economic background, viewed as uncultured; originally typified as wearing a flannelette shirt, black jeans and boots, and having a mullet hairstyle”

都会から離れた郊外出身の社会経済階級の低い無教養なオーストラリア人¹⁹で、もともとは、フランネルシャツとブラックジーンズにブーツを合わせ、マレット (左右が短く、後ろ髪が長い) ヘアスタイルをしているのが特徴とされた [引用者訳]。

どうやら、粗野な労働者階級出身者を指す表現のようであり、(52) “the most bogan Asian Australians” という表現から、もともとは白人オーストラリア人を対象に用いられていたことがわかる。ロウは (51) “inner bogan in me” によって「アジア系オーストラリア人」であると同時に「地元根付いたオーストラリア人」としてのアイデンティティを表明しているのである。

そして、ロウは最後に、ときどき受けるという (53) “so, I think you know, people, people sometimes ask, ‘do you see yourself more Asian or more Australian?’” (あなたは自分のことをアジア人とオー

¹⁸ Macquarie Dictionaryはオーストラリア英語の辞書で、1981年に初版が出版され、2003年からはオンライン版も開始。https://www.macquariedictionary.com.au/ (最終アクセス2017年10月27日)

¹⁹ ‘Bogan’ は、豪ABC放送の*Upper Middle Bogan* (2013–2016) というコメディドラマによると、現代では女性に対しても用いるようである。

ストライア人のどちらだと思いますか」という質問をスモール・ストーリーとして語ったうえで（レベル1）、(54)そうした質問は、先生でもあり、母親でもあって、妻でもある人に、“do you see yourself more as a wife or a mom or a teacher?”（あなたは自分のことを妻と見ますか、母親だと見ますか、それとも先生だと見ますか）と聞いているのと同じことであると類例（analogy）のレトリックを用いて反論している。

つまり、「あなたは自分のことをアジア人とオーストラリア人のどちらだと思いますか」という主流派の質問は、分類（Categorization）（van Leeuwen, 2008）を意図した行為であり、こうした社会主流派が行う人種による「分類行為」を見破っているロウは、聴衆にそれがいかにオーストラリアのような多文化社会においては、人種差別的で礼を欠いた行為であるかをやんわりと理解させようとしているのである（レベル2）。ロウは十代の頃はアイデンティティに葛藤を抱いていたものの、今や「アジア系オーストラリア人」としてのアイデンティティを確立しており、「アジア人」と呼ばれることを許容しているが、彼の中でそのことは、すなわち「非オーストラリア人」であることを意味しないのである。ロウの発言に、(51) “so there is this inner bogan in me all the time that I carry (….) as much as my Asian heritage and I don't think that they're completely distinguishable or apart from each other”（私の内面にはアジア人として引き継いだものと同時にボーガンな面がいつもあるのです。それらは見分けがつかないし、切り離せるものでもありません）とあるように、両親はアジア生まれながら、オーストラリアで生まれ育ったロウは、外見がアジア人だからといって、オーストラリア人でなくなるなどあろうはずもなく、同様に「教師」という職に就く者も、結婚し、出産したからといって「教師」、「妻」、「母親」の3つのアイデンティティのいずれかが完全に切り離されるなどということはない。(55) “you are all of those things and those things are actually interact with each other as well”（あなたはそれら3つのすべてであり、それらは実際、お互いに融合して

いるのだ) という発言にあるように、むしろ3つのアイデンティティは融合しているのである。この事と同じ理屈で、人種を問う質問は愚問であるとロウは訴えたかったのであろう。こうした日常で起こり得るさり気ない人種差別 (everyday racism) (Essed, 1991) に対する毅然とした態度は、現代を生きる「アジア系オーストラリア人」の肯定的なアイデンティティの現われだと言えよう (レベル3)。

7. 結論

本論では、ポジショニング理論を用いてデータを区切ったが、3つのレベルで分析することで、ロウのアイデンティティをより多面的に捉えることができた。また、CDAを用いることで、移民二世のアイデンティティに揺れる十代の心情や、社会のアジア系移民に対する固定的で因襲的な見方に対する彼の不満や葛藤が明らかになった。また聴衆にそういった点を伝えるためにロウが用いた言語的な戦略もCDAを分析ツールとして援用することでより明確になった。たとえば、“not~at all” や、“definitely”, “famously” といったモダリティーを表す表現や、“not quite” を二度繰り返す再言 (repetition) のレトリックを本論では確認できた。

以下に各レベルでの結論をまとめると、レベル1では、まず、テーマ・パークへの家族旅行のスマール・ストーリーが見られた。そこでは、自分たちと見た目では変わらないアジア人旅行者を前にすると、「オーストラリア人」としてのアイデンティティをより強く意識した十代のロウや彼の兄弟姉妹のポジションが読み取れた。また、ハワード元首相に関わるスマール・ストーリーでは、同氏を「多文化社会の現実から目を背ける人物」として、ロウと対極に位置づけていることが確認できた。さらには、ナラティブの中で、白人が抱くアジア人のイメージを列挙して、聴衆の期待を一気に高めておきながら、結果として「アジア人のステレオタイプから外れた自分」というポジションを提示する場面も確認できた。インタビュー終盤の質疑応答では、聴衆から「どの国に一番帰属意識を感じますか」という質問を受けたロ

ウが、「断然オーストラリアだ」と回答したうえで、(53)「『自分をアジア人と思えますか、それともオーストラリア人と思えますか』と人(“people”)が尋ねてくることがある…」と、登場人物を「一般オーストラリア市民」としたスモール・ストーリーを挿入する。ここでは、「アジア人であり、オーストラリア人でもある」という混成性(hybridity)こそが「アジア系オーストラリア人」なのであり、自身のアイデンティティなのだと言ウが表明していることが確認できた。

次にレベル1のスモール・ストーリーが、どのような意図で利用されているのか、それらがレベル2においてどのような効果をもたらしているのかを考察する。ロウは、インタビューの冒頭で「オーストラリア社会で人種を問わず人気の作家・コメンテーター」としてのアイデンティティを司会者と共同構築した後に、テーマ・パークのスモール・ストーリーを利用して、「アジア系オーストラリア人」としてのアイデンティティを全面に押し出していた。しかし、その後、ナラティブを利用して「アジア人のステレオタイプから外れた自分」を主張していることから、実はステレオタイプを当てはめられることには抵抗を感じていることがわかった。また、(53)のスモール・ストーリーは、マイノリティに対して人種を問う質問をすることは、「分類行為」であり、それは人種差別であると聴衆に訴えるために用いられたものだと言ウが解釈できるが、ロウは、「時々、人が尋ねてくるが…」と一般化したスモール・ストーリーを活用することで、質問をした聴衆を直接的・個人的に責めると角が立つところを、うまく両者の衝突を回避しているようであった。さらに、ハワード元首相を登場させたスモール・ストーリーは、「オーストラリア人は誰しもエスニックな出自があるものだ」というロウ自らの主張を強めるために用いられたものであると解釈できる。このように、ロウは、「アジア系オーストラリア人」のポジションを提示し、自分を冷静に俯瞰しているようだが、インタビュー後半になると、徐々に持論を展開し、自身と司会者・聴衆との間の友好的な関係を保ちながら相手を説得する目的で、スモール・ストーリーを巧みに利用していることが明らかになった。結果、

レベル1でのスモール・ストーリーの利用により、レベル2における司会者と聴衆に「それぞれの出自を持つオーストラリア人」という新たなポジションが付与され、聴衆、司会者、およびロウの関係はより対等なものに変化したといえる。

最後にレベル3では、インタビューの開始時と終了時で、ロウのアイデンティティに変化がみられることが確認できた。インタビューの冒頭からロウは、「アジア系オーストラリア人作家」として位置づけられていたものの、おそらく司会者と聴衆からは、エスニックな「符合」や「体験」を持つ存在としてのアイデンティティを付与されていたはずである。それが、ロウによるアイデンティティ構築とロウと司会者および聴衆とのアイデンティティ交渉を経て、インタビュー終了時には、そうした「符合」は消えており、さらに、よく言われるような社会の主流派である「白人オーストラリア人」の対立項としての「アジア系オーストラリア人」ではなく、さまざまなエスニックが存在する多文化社会における「アジア系オーストラリア人」という肯定的なポジションに変化したと言えよう。

このように、ロウはインタビューを通して、ステレオタイプに当てはまらないアジア系オーストラリア人としてのアイデンティティを構築しており、「アジア人」対「白人」の二項対立を超越した存在となっていることが本研究により鮮明になったと言える。

参考文献

- Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 335-342.
- Bamberg, M. (2004). "We are young, responsible and male": Form and function of "slut-bashing" in the identity construction in 15-year-old males. *Human Development* 47, 331-353.
- Bamberg, M. (2006). Stories: Big or small. *Narrative Inquiry*, 16, 139-147.
- Bamberg, M. & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories. *Text &*

- Talk, 28-3, 377-396.
- Blackledge, A. (2005). *Discourse and power in a multilingual world*. Amsterdam: John Benjamins.
- Cameron, D. (2001). *Working with spoken discourse*. London: Sage.
- Davies, B., & Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for Theory of Social Behaviour*, 20, 43-63.
- Dunn, K. M., Forrest, J., Babacan, H., Paradies, Y., & Pedersen, A. (2011). *Challenging racism: The anti-racism research project: National level findings*. Penrith: University of Western Sydney. Retrieved March 27, 2018, from http://www.uws.edu.au/__data/assets/pdf_file/0007/173635/NationalLevelFindingsV1.pdf
- Errington, W., & van Onselen, P. (2007). *John Winston Howard: The definitive biography*. Melbourne: Melbourne University Press.
- Essed, P. (1991). *Understanding everyday racism: An interdisciplinary theory*. London: Sage.
- Gal, S. (2006). Linguistic anthropology. In Brown, K. (Ed.), *Encyclopedia of language and linguistics*. Oxford: Elsevier. 171-185.
- Georgakopoulou, A. (2007). *Small stories, interaction and identities*. Amsterdam: John Benjamin Publishing.
- Gumperz, J.J. (1968). The speech community, in D.L. Sills (ed.), *International Encyclopedia of the Social Sciences*. New York: Macmillan, pp. 381-6.
- Hatoss, A. (2012). Where are you from? Identity construction and experiences of 'othering' in the narratives of Sudanese refugee-background Australians. *Discourse & Society*, 23(1), 47-68.
- Krzyżanowski, M., & Wodak, R. (2007). Multiple identities, migration and belonging: 'Voices of migrants'. In Caldas-Coulthard, C.R., & Iedema, R. (Eds.), *Identity trouble: Critical discourse and contested identities*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. 95-119.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the Black English*

- vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In Helm, J. (Ed.), *Essays on the Verbal and Visual Arts*. Seattle: University of Washington Press. 12-44.
- Law, B. (2015). It's easy to make friends with white people. In Soutphommasane, T. (Ed.), *I'm not racist, but...*. Sydney: NewSouth Publishing. 244-248.
- Schiffrin, D. (2006). *In other words: Variation in reference and narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sicakkan, H. G., & Lithman, Y. (2005). Politics of identity, modes of belonging and citizenship: An overview of conceptual and theoretical challenges. In Sicakkan H. G., & Lithman, Y. (Eds.) *Changing the basis of citizenship in the modern state: Political theory and political diversity*. New York: Edwin Mellen Press, 1-35.
- van Dijk, T. (1996). Discourse, power and access. In Caldas-Coulthard, C.R., & Coulthard, M. (Eds.), *Texts and Practices: Readings in critical discourse analysis*. London: Routledge. 84-103.
- van Leeuwen, T. (2008). *Discourse and practice: New tools for critical discourse analysis*, London: Routledge.
- Wodak, R., & Meyer, M. (2009). Critical discourse analysis: History, agenda, theory and methodology. In Wodak, R., & Meyer, M. (Eds.), *Methods of critical discourse analysis* (2nd edition). London: Sage.
- アング, I・ストラットン, J. (1998) 「アジア化するオーストラリア：カルチュラル・スタディーズにおける批判的なトランスナショナルリズムに向けての考察」伊豫谷登士翁・テッサ・モリス＝スズキ・酒井直樹編『グローバル化のなかのアジア ―カルチュラル・スタディーズの現在―』東京：未来社 pp. 35-80.
- グラスビー, A. (2002) (藤森黎子訳)『寛容のレシピ ―オーストラリア風多文化主義を召し上げられ―』東京：NTT出版。[原

- 著：Grasby, Al. (1984) *The tyranny of prejudice*, Melbourne: Australian Educa Press.]
- ハリデー, M. A. K. (2001) (山口登・笈壽雄訳) 『機能文法概説 —ハリデー理論への誘い—』東京：くろしお出版。[原著：Halliday, M. A. K. (1994) *An introduction to functional grammar, 2nd edition*, London: Edward Arnold.]
- フェアクロー, N. (2008) (貫井孝典監修, 他訳) 『言語とパワー』大阪：大阪教育図書。[原著：Fairclough, N. (2001) *Language and power, 2nd edition*, London: Longman.]
- ホルスタイン, J.・グブリアム, J. (2004) (山田富秋他訳) 『アクティブ・インタビュー —相互行為としての社会調査—』東京：せりか書房。[原著：Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. London: Sage.]
- 有田有希 (2013) 「『食わせれる？旦那』にみる伝統的結婚観とそれに拮抗する新たな規範の交渉」佐藤彰・秦かおり (編著) 『ナラティブ研究の最前線 —人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房, 225-246.
- 有満保江 (2003) 『オーストラリアのアイデンティティ —文学にみるその模索と変容—』東京大学出版会.
- 唐津麻里子 (2011) 『ストーリーテリングにおける語り手の自己表出と語彙・文法表現 —会話物語「サンタクロースの衣装を買った」の分析—』日本語／日本語教育研究〔2〕web版, 267-286.
- 秦かおり (2014) 「国外在留邦人が語る東日本大震災：対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する」『言語文化研究』40：123-142. 大阪大学.
- 秦かおり・岡本多香子 (2013) 書評, 社会言語科学15(2)：66-70 [原著De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.]

Appendix

トランスクリプト記号 (based on Cameron, D. (2001) pp. 31-41.)

[オーバーラップ開始部
(.)	マイクロポーズ
(…)	聞き取り不可能な語
…	中略
大文字	強調, 声大きい箇所
-	長めのポーズ
:	長音
斜体	書籍の名前
“	引用文
@	笑い
#	ざわめき
\$	溜息
(↗)	上昇イントネーション
下線	著者による分析上の強調

(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科 博士後期課程)